僕と彼女の恋の色

AZΣ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私立葵上（あおいのうえ）高校に通う、赤嶺（あかみね）樹（いつき）。彼には一人の幼なじみがいた。

――これは樹とその幼なじみ、白沢（しらさわ）琥珀（こはく）の十年振りの再会から始まる物語――

目次

プロローグ
1話　再会 ―― 1
変わった日常
2話　彼女の訪問 ―― 9
3話　イケメンの宣言 ―― 19
4話　学園長の娘 ―― 28
5話　すれ違いの始まり ―― 38
6話　すれ違いの始まり2 ―― 50
7話　修学旅行 ―― 61

プロローグ

1話　再会

僕は、赤嶺（あかみね）　樹（いつき）。私立葵上（あおいのうえ）高校に通う、高校二年生だ。自分で言っていて何だけど、いつもの自分と違い過ぎていて、物凄い吐き気がする……

そんな僕は、次第に暑くなり始めたと感じる、5月のゴールデンウィーク明けに、対して楽しくもない学校へ向かって歩いていた。

学校は、僕の家から十分もあれば行ける距離にあるので、いつも通り、自分のペースに合わせて、ゆっくりと歩いていた。そして、学校に着く頃には、聞きたくもない同じ学生達の声が僕の耳に入ってくる。

「ゴールデンウィークどうだった～?」

「私は楽しかったよ～……」

チャラそうな男子と、大人しそうな女子が会話をしている。女子は、チャラそうな男子の押しの強さに負けているようだ。

その女子には多少、同情もするが、聞きたくもない話を聞かされる僕の身にもなって欲しい。

そんな事を考えながら、僕は早足で校門を通り抜け、いつも通りに、下駄箱から上履きを取り出して履く。そして、教室に行くために階段を上がっていく。

二階の階段側にある教室が、僕が在籍しているクラスだ。後ろの扉を開けて、窓際の一番後ろの自分の席へと向かう。

クラスメイト達は既にほとんどが登校しており、何人かで集まって話していた。恐らくはゲームやファッションの話でもして、ホームルーム前の退屈な時間を凌(しの)いでいるのだろう。

そんな中僕は基本、人と会話をせずに、読書をして時間を過ごす。

人と会話をするのが苦手なのもあるが、正直面倒だと思っているし、そんな人に気を遣う作業をする位なら、僕に、多くの素晴らしい物語を提供してくれる本を読んでいる方が、よっぽど楽だし幸せだ。

「なぁ、聞いたか？　今日、転校生が来るらしいぜ？」

（よくある会話だな。そんな事を気にして、一体どうすると言うんだ、そもそも、人の好みというのはそれぞれ違うのに……）

そんな僕の心中(しんちゅう)とは裏腹に、彼等の会話はエスカレートしていく。

「聞いた聞いた！　何でも美人らしいぜ？」

「マジかよ!?　楽しみだなぁ～」

ほら、そんな話ばかりしているから、女子達からの殺気が凄い事になっているじゃないか。僕には全く関係ないが。大体、そんな美人がこんな所に何を学びに来ると言うんだ？

さっきまで、堂々と語り合っていた彼等だが、女子達の殺気に漸く気付いたようだ。彼等は即座に会話を止め、自分達の席に戻った。

しかし、転校生ねぇ……そういえば彼女は元気にしているのだろうか？　まあ、確認する術がないので知りようもないが、彼女の事だし、きっと周りの人を振り回しているんだろう……

そんな事を考えながら、僕は本を読み進めていき、いつの間にか、ホームルームの時間になっていた。

ホームルームのチャイムが鳴り響くと、体格のがっしりした短髪の男の先生が、教室に入ってきた。このクラスの担任の、紫藤　健次先生だ。

「おはようございます！今日から皆に新しい仲間が出来るぞ！」

彼はその顔と体格からは想像の出来ない、少々高い声で言った。

「では、入ってくれ！」

◆

日本の学校は久しぶりだなぁ～……懐かしいや……あいつもこの学校に通ってるらしいし……十年振りだし、びっくりするかな？いや、あいつの事だし、そんな事もないか……？でも、もしかしたら、あいつも変わってるかもしれないなぁ～……

そんな期待を胸に私は、教室の扉の前で待っていた。すると先生の声が聞こえ始めた。そろそろかな……？少し緊張してきたな……

「では、入ってくれ！」

先生からの合図が来た。私は覚悟を決めて、教室の扉を開けて、中に入っていった。

「うおおおおっしゃあああ!!!可愛い子来たぜぇぇぇぇぇ!!!」

「俺達は勝ったんだぁぁぁぁぁ!!!」

「あの子……凄い綺麗（きれい）……」

教室に入って、教壇の上に立った私の耳に突然響いたのは、私を見た男子達の歓声と女子達の感嘆の声。しかし、そんな事は今の私のにはその全てがどうでも良く、私の視線はただ一人、十年前に別れた男の子に注がれていた。

（十年前と全然変わってない……！　　そのまんまで大きくなったみたいだ！）

彼は、十年前と変わらず、黒い髪を短く切り揃えた髪型で、顔は少し大人びたくら

い。しっかりと面影(おもかげ)も残ってる。

今の彼の顔は珍しく、目の前の光景が理解出来ないようだった。見た感じ、身長も今じゃあ私よりも大きいように見えた。昔は私の方が大きかったのに……身体はまだ弱そうだけど……

「おーい！　樹ー、久しぶりー！　帰って来たぜー！」

再会が出来て嬉しい私は、窓際の一番後ろの席の彼、赤嶺　樹に、満面の笑みで手を振っていた。

◆

扉を開けて、教壇の前に立った少女を見て、僕は見間違いじゃあないかと何度も自分の目を疑った。

少女の外見は、僕が知っている、十年前に別れた幼なじみ、白沢(しらさわ)　琥珀(こはく)とほとんど変わらなかったからだ。

背中まで伸びた真っ白い髪、男子のみならず、かなりの数の女子すら魅了する、その端正な顔立ち。そして、完璧なプロポーション。身長は少し小さく見えるような気も

するが……

（間違いなく彼女だよな……こんなに突然戻ってくるなんて、全く彼女らしい……）

顔は驚きのあまり、硬直したままだったが、僕の頭はしっかりと働いていた。そして、やっとの事で、浮かべる表情を、驚きから呆れに変える。すると彼女の瞳が、僕を見つめている事に気付く。

（おいおいまさか……流石にここでは何も言わないだろうな……!?）

「おーい！　樹ー、久しぶりー！　帰って来たぜー！」

彼女が僕に、満面の笑みで手を振った瞬間、僕の小さな望みは跡形もなく絶たれ、クラス中の視線がこちらに集中した。

（何であいつはこうも昔から僕を面倒事に巻き込んでいくんだよ!?　僕は君とは違って、人に注目されるのが平気な訳じゃないのに……）

「おーい、皆静かに！　では、自己紹介を頼む」

「はい！」

先生の一言で、生徒達の、僕への視線による虐めはなんとか回避された。そして、先生に彼女は鈴のような、よく通る、美しい声で返事をし、黒板に名前を書き始めた。

「白沢　琥珀です！　よろしくお願いします！」

「うおおおおおおおお!!!」

彼女の挨拶を聞いた男子達のテンションが、また上がり始めたが、先生が再度それを諭した。ありがとう先生、貴方が注目をそらしてくれたお陰で殺されずに済んだ……

しかし、次に先生の口から発せられた言葉は、僕は止めを刺すに等しい内容だった。

「白沢は、赤嶺の知り合いらしいし、丁度席も空いているから、赤嶺の隣に座りなさい」

「はい！」

……先生、何て余計な気遣いを……先生のせいで、僕は再びクラスメイト達に、好奇と殺意の籠った視線を浴びて、メンタルに甚大なダメージを負っているのですが。胃腸薬を沢山飲んでもキツそうなのですが。

そんな僕の心中も露知らず、彼女は笑顔で、僕の隣の席に座った。

「またよろしくな？　い・つ・き君？」

彼女は僕の隣で、僕の顔を覗き込むようにして、再び笑った。彼女の笑顔は確かに美しいが、それで僕のこれからの苦労が消える訳じゃない。

（全く……彼女と一緒にいると、どう頑張っても面倒事に引きずり込まれてしまう……彼女の側にいると、振り回される事が当たり前だ……また十年前のように胃腸薬を常備する羽目になるのか……はぁ）

僕は観念して、彼女の顔を見据える。すると、彼女は満足したようで、先生からの簡単な説明を聞き始めた。

そしてこれは、面倒事が嫌いな僕が、自分とは正反対の彼女と共に歩んでいく、そんな物語だ。

変わった日常
2話　彼女の訪問

今日、僕のクラスに転校してきた彼女は、僕が十年前に別れた幼なじみ、白沢琥珀だった。彼女は、身体的には成長していたが、中身は昔と変わらず、僕を振り回す存在だった。

そして今、彼女は先生の気遣いにより、僕の隣の席に座って、授業を受けている。そして、彼女は先生の授業をしっかりと聞いているように見えるが、実は見えるだけで、本当は何も聞いていないのだ。

言い忘れたが、彼女は頭が良い。推理小説などを読んでいても、真相がすぐに分かってしまう。勿論(もちろん)、そんな事は嘘だと思って、僕が、その小説を読んで確認をした事がある。

結果は全てが当たっていた。なので、授業などはほとんど聞かなくても、成績はいつも上位、そして運動も出来るという、正に超人である。

最早(もはや)、教育を受けなくても、自分だけで生きていける位の能力は備えているんじゃないだろうかと思う。

　そして、そんな彼女に対して僕は、成績は努力して、何とか平均点、運動は人並み以下、そして、一人暮らしはしているが、食べ物は基本インスタントの食品ばかりの、何とも残念な奴である。
　そんな才能に満ち溢(あふ)れた彼女だが、その才能を生かす事なく、学校に通っている。前に彼女に質問をしたのだが、返ってきた答えは、友達と一緒に過ごす時間を、出来るだけ大事にしたいからという、ありがちな理由だった。
　友達がいない僕には、それが理解出来ない。誰にも迷惑を掛けずに生きていけるならば、僕はそうしたい。そうすれば、自分が無理に人に合わせる努力などはしなくて済むのだから。
（全く……僕には、君の事が理解出来そうにないな、今も昔も……）
　そんな事を考えていたら、いつの間にか、授業が終わっていたようだ。クラス全員で立ち上がり、先生に挨拶をする。
　そして昼休みになると、彼女の周りには沢山の人が集まってきた。僕だったら、こんな人数を前にしたら、面倒過ぎてそっと立ち去るだろうが、彼女は一人一人としっかり向き合って会話をした。
「白沢さん、前の学校はどこだったんだ？」
「アメリカの学校だよ。家族からの勧めもあったし、私も興味があったから行ってたの」

「白沢さん、どうやったら、そんな綺麗な髪になれるの～？教えて～」
「別に皆と変わらないよ～、拘(こだわ)ってる訳じゃないし……」
「白沢さん、アドレス教えて下さい！」
「う～ん……ごめんなさい」
「嘘ぉぉぉぉ!?」
「ほら、お前じゃ無理なんだよ！」
「ちくしょー!!!」

彼女の周りに集まった人達は、転校生に必ず聞く質問をしていく。彼女は思った事は基本曲げずに言ってしまい、時々、相手に失礼な事を言ってしまう。

しかし、彼女自身の人柄の良さで、トラブルになる事は滅多(めった)にない。そこは素直に、彼女の尊敬出来る部分だ。

僕は正直、人の多さに耐えられなかったので、図書館に向かった。彼女が、そんな僕の後ろ姿を見ていた気もするが、恐らく気のせいだろう。

図書館に着くと、僕は一つ、大きな溜め息をして、平常心を取り戻した。

「ふぅ～……人気者が側にいると、大変そうで見ていられないや……」

僕は、彼女のように、人と話す事は得意じゃない。なので、出来る事なら会話をしたくないし、どうしてもと言う時でも、最低限の会話で済ませたい。

こんな事を考えながら、僕は本棚にあった、一冊のファンタジー小説を取り出した。うん、今日はこれにしよう。

僕は椅子に座り、本を開いて、その世界へと入っていった。本の世界は楽しい。自分とは違う、他の誰かの考えに触れる事が出来るからだ。

集中して読んでいたようで、次に聞こえた音は、次の時間の予鈴だった。

「もうこんな時間か、早く戻らないと……」

そう思った僕は、本棚に本を戻し、急いで教室まで戻っていった。

教室に戻ると、既にクラスメイト達は全員着席しており、先生が来るのを待っていた。そして、この授業も、彼女は先生の話を聞く振りをし、僕は、ノートを取りつつ、早く、家に帰る事を望んでいた。

やっと、終鈴が鳴り響き、この日の全ての授業が終わりを告げた。今日は先生方の

都合で、清掃は免除され、僕は一人、ゆっくりと我が家へ向けて歩いていた。

家に着くと、僕は一度風呂に入り、私服に着替えてから、自分の部屋に向かった。

（はぁ～……全く、彼女が帰って来るなんて……正直、予想外の事態だ……）

僕は一刻も早く頭を休めようと、自分の部屋の扉を開けた。扉を開けると、そこには大きな二つの本棚と、一台のテレビが、ベッドから見やすい位置に配置しておいてある。

そして、今日の疲れを癒すために、眠ろうベッドに飛び込もうとした。するとそこには、葵上高校の制服を着た、彼女がいた。

「よう！随分長いお風呂だったね！」

「どうして君がいるの……？」

見た所、どこも破壊された形跡はなかったけど？と僕が言おうとすると、彼女はそれを遮り、

「君の家の鍵を見つける事なんて、私には朝飯前なのだよ、ワトソン君？」

と、自慢気に言った。疲れのあまり、彼女の頭の良さの事は、僕の頭の中から抜け

落ちていた。彼女の推理力は普通じゃないとも思うけれど。
「ワトソンじゃないし……それに、君に掛かったら沢山の作家さんが大泣きするよ、折角、考えに考えを重ねたトリックとかを、君はすぐに見破っちゃうんだからさ」
　そう僕が彼女に言い返すと、彼女はそんな事には、もう興味がないように、僕の部屋を見渡し、こう言った。
「本当に本とテレビとベッドしかないね、相変わらず」
　余計なお世話だ。趣味は人それぞれだろうに……僕が、そんな事を考えているのも知らずに、彼女は、
「ゲームしようぜ！」
　と、言って、僕を自分の隣に座らせた。やっぱりこうなるのか……彼女がいた時点で、ある程度は予想が付いていたので、驚きはしない。昔の僕も、彼女も一緒にいると、必ず読書の時間がゲームに使われたものだ。
「それで？何をするの？」
　一応話を聞いて、面倒臭そうだったら逃げようと思いながら、とりあえず話を聞いてみた。すると、彼女は嬉(うれ)しそうに笑みを浮かべ、一つのゲームソフトを鞄(かばん)から取り出す。
「これだー!!!」

彼女の言い様に、思わず効果音が聞こえた気がした僕は、驚いてしまった。そして、このソフトはどうやら、パッケージからして、格闘ゲーム系の何からしい。

「え～……こういうゲームは苦手なんだけど……」

「私がやりたいんだ！さあ、つべこべ言わずに、やるぜー!!!」

（……完全に彼女のペースだ。これはもう、逃げるのは無理か）

僕は観念して、彼女と格闘ゲームに興じる事にした。思いの外、上手くキャラクターを動かす事は出来たが、彼女のセンスの前には勝ち目がなかった。

「で？今度はどこに住んでるの？」

「ここからそんなに遠くないマンションだぜ～、来るかい～？」

ゲームに飽きた頃、彼女が僕のベッドに座りながら聞いてみた。僕がこういう事を聞くと、彼女はいつもこうやって茶化す。そして、彼女の顔を見るとうっすらと笑っている。

（本当にこいつは……喋らなければ可愛いのに……）

流石に彼女がいくら超人でも、美少女には変わりはないのだから、危険があれば困る。外には色々な価値観の人がいるのだから。

「ほら、送っていくよ」

「えっ？あ、ああ、うん……」

こうして僕は、彼女を家まで送りとどけるために外出した。彼女が僕の横を通ると、彼女の白い髪から、少しだけ、女子特有の甘い香りがした。

◆

（いやー、正直予想外だなぁ……あの彼が、私を家まで送ってくれるなんて……やっぱり、この十年間で、何かが変わったのかな？）

私が、そんな事を考えていると、二つの分かれ道に出た。彼は、

「ここからは？」

と、道順を聞いてくる。まあ、身体はそんなに昔と変わった所はなかったから、外にはそんなに出ないんだろうという事が分かった。

「左。そっちの方向だぜ！」

「はいはい……」

彼は面倒臭そうだったけれど、私を気遣う気持ちは何とかあったらしい。私の案内で、彼は少しずつ、私の家に近づいていく。少しだけ、自分の鼓動が早くなった。理由は分からないけど……

「ここで良いよ、ありがとうな～！楽しかったぜ～！」
「それは良かったね、じゃあ、また明日」
「おう！」
　そう言って、彼が私に背を向けて歩いていく。その姿を見て、少しだけ、胸の辺りに痛みを感じたようだったけれど、すぐに収まったため、不思議に思った。
「私……どうしたんだろう？」
（まあ、細かい事は気にしても仕方ないか！明日はどうやってあいつをからかってやろうかな～？）
　そう思った私は、さっきの痛みの事なんか、すっかり忘れて、家の中に入っていった。

◆

「……へぇ～、あの子、俺好みだなぁ……」
　俺は、さっきまで外にいた少女を見て、そう思った。あのレベルの可愛さの女子は、この辺でも中々いない。

「確かあいつは、転校生だったよな……これからは、面白くなりそうじゃんか……」

そう独り言を言いながら、夜の街灯に照らされつつ、俺は自分の家に帰っていった

……

3話　イケメンの宣言

　僕が彼女を家に送ったその帰り道、一人の男子高校生とすれ違った。高校生だと分かったのは、彼の着ていた服が、僕の学校の制服だったからだ。
（彼女に何か用かな……それにしたってこんな時間に、女の子の家に近付くのはどうかと思うけど）
　彼は、彼女の家の方向に真っ直ぐ向かったので、僕の予想は当たったようだった。そして、彼は彼女を探すのに夢中だったため、すれ違った僕には気付かずに通り過ぎていった。
（まあ、彼女の問題だし……僕が無闇に首を突っ込んで良いとも限らないな）
　こうして僕は自分の家に帰り、明日の準備を済ませてからベッドの中に入って眠りについた。

　朝になってから、僕はまず顔を洗い、軽食を取った。食べたのはコーヒー味のゼ

リー、この程よい苦味から、僕の日常が始まる。

　こうして、僕はいつも通りに学校へ向かう。桜の花びらが散り始め、代わりに緑色の葉が生え出した木々を見ながら、今日、起こるであろう事態の予想を前もってしておく。

（今日は一体、彼女がどんな事を仕出かすんだろう、想像しただけでも胃痛がして……）

「おっはよー、樹ー！」

　僕がこう考え始めたところで、まるで見計らったかのように、彼女は脇道から現れた。口は災いの元とはよく言ったものだ。今回は喋ってはいないけれども、本当に身に染みて分かった。

「どうしたの？元気ないじゃん」

　そんな事を僕に言う彼女は、昨日と同じくエネルギーに満ち溢れている。その状況を見て、僕とはやはり反対なのだと自覚させられる。そして、彼女は素早く僕の腕を掴み、強引に教室へと引っ張っていく。

「ほら、行くよー！」

「はいはい、分かったから離して……」

　何とか彼女の腕を振り払い、僕は教室へ入る。直ぐ様僕の方向に、クラスメイト達の視線が向く。しかし、彼等が見ているのは僕じゃなく、僕の後ろから入ってくる、彼

女の姿だ。
「白沢さん、おはよ～」
「うん、おはよ～」
「し、白沢さん、おはようございます！」
「おう、おはよう！」
　彼女の周りには瞬く間に人が集まる。いつもの事だ。そして僕は一人、平穏に席へ着く。すると、僕の方に一人だけ、歩いてくる男子生徒がいた。
「よう、赤嶺。こうして話すのは初めてかもな」
　彼は僕にそう話し掛けてくる。自分の事を知っていて当然という、自信に満ち溢れた顔をしていたが、僕は彼の事を記憶に留めてもいなかった。
「そうだけど……誰かな？」
　僕がこう聞き返すと、彼は唖然（あぜん）とした顔をした。思わずだったのだろう、彼は直ぐに元の自信に満ち溢れた顔に戻り、自己紹介をし始めた。
「まあ、そんな事もあるか。俺は黒崎（くろさき）　大翔（ひろと）だ。一応同じクラスなんだけどな……」
（ああ、そう言えば見た事はあるな。いつも女子達が彼を見ると騒いでいたような気がする。同じクラスだったのか……）
　彼は確かに格好良く見える。薄い茶色に染めた髪を短めに切り揃えており、背も高

く、１７５ｃｍ以上はあるだろう。そして、顔は程よくパーツが散っていて、鼻も高い。そして、その肌は運動をよくするのか、健康的な小麦色だった。

「それで？僕に何の用？」

「あ、ああ、そうだった。お前、白沢と仲良いよな？」

（何を言うかと思えばそういう事か……大体、彼女に関して聞く事はこういう事に決まっているしな……成る程ね）

「大体分かったよ。で、僕に何を？」

　彼は前々から決めていたように、そして僕に悪戯をして楽しんでいるような顔をしてこう言った。

「いや、どうして欲しいとかじゃなくて、確認なんだ。

　……白沢の事、落として良いよな？」

　そんな事を言われて僕、が動揺するとでも思ったのだろうか。それとも動揺しない僕が異常なのだろうか。

「……そんな事、僕に聞く事じゃないよ。好きにしたら良いと思う」

　僕がこう答えると、彼は何だか気の抜けた顔をしていた。まるで、僕が怒ると思っていて、期待が外れたような感じだ。

「何だよ、そうか……じゃあ、遠慮なくやらせてもらうぜ」

そう言って彼は去っていった。去り姿まで絵になっている。いや、絵になるように努めているんだろう、僕から見たら、自分を偽って無理をしているように見える。
（まぁ、どうでもいいか）
そう思い、僕は図書館から借りてきた、ファンタジー系の小説を読み始めた。そしてその時、隣に彼女が座った気配がした。

◆

（はぁ〜、人と話すのは好きだけど、毎日あの調子だとやっぱり堪えるよな〜……）
そう思いながら、私は樹の隣に座る。彼は集中して、一冊の小説を読んでいる。多分、この状態の彼は、私がいくら話し掛けても答えないだろう。
（そんなに面白いのかな？今度読んでみようかな）
そんな事を考えて、彼の読んでいる小説のタイトルを見る。いかにもと言った感じのファンタジー系だ。彼の家にも昔からたくさんあったので、趣味は変わっていないようだ。
結局彼は、ホームルームが始まる前まで一言も喋らずに本を読んでいて、休み時間

でもそれは同じだった。

「樹ー！　　一緒に帰ろうぜぇー！」

私が声を掛けると、彼は面倒くさそうに、前の扉側の席を指差した。

「えっ？何？」

私が困惑していると、彼が指差した方向から、一人の男の子が歩いてきた。

「白沢さん、送っていくよ」

その男の子は私にこう言った。確か彼は、他の女の子達に人気だったような気がする。

「えっ～と、確か黒崎君……だよね？どうして急に？」

「白沢さんって綺麗だから、これを機会にお近づきになろうと思ってね」

私が聞くと、彼は笑って言った。正直キザ過ぎて若干引いたけれど、彼の笑い方は確かに格好良かった。そして、その笑顔には意外と可愛さも目立っていた。

（大抵の女の子達は、彼のいつもの格好良さと、このたまに見せる笑顔で好きになるんだろうなぁ……）

思わず見とれてしまったけれど、少し経つとその魅力も薄れてしまった。私には、何故か彼の表情が作り物のような気がして。

そして、私が隣にいるはずの彼の方に目を向けると、いつの間にか、彼はいなくなっ

ていた。彼がいないと分かった時、私の心が一瞬揺れたような気がしたけれど、多分気のせいだろう。

そう思い、私は黒崎君の言葉に素直に甘え、自分の家まで送ってもらう事になった。彼はとても優しく、私を家まで送っていってくれたのに、彼が側にいると、何故か落ち着かなかった。

「ここで良いよ、ありがとう！」

頑張って明るい声を出して、私は彼にお礼を言った。そして、彼もまた、教室で見たような笑顔を浮かべて、

「いやいや！俺も楽しかったぜ、ありがとうな！……っとメルアド、交換しないか？」

彼がそう言ってきたのは、正直予想外だったけれど、送ってもらった手前、断るのは気が引けた。

仕方なく、彼とメールアドレスを交換し、彼はしっかり出来たかを確認すると、私に手を振りながら、ゆっくりと帰っていった。

だけど、黒崎君に送ってもらうのは、正直、あまり嬉しくない。出来る事なら樹が

良い。どうしてこう思うのかはまだ分からないけれど。

（ええい、細かい事を考えるなんて私らしくないぜ！　うん、そうだ！）

そう思い直して、私は玄関に入り、台所に向かう。家の台所は居間と繋がっているが、広さはそこまでじゃない。多分、一般的な広さだと思う。

流し台の下は棚になっていて、調理器具を取り出すのにとても便利だ。そして、流し台の反対側には二つのコンロがついている。

まず、下の棚からまな板と包丁を取り出す。そして、冷蔵庫から玉ねぎ、人参、じゃがいも、豚肉を取り出す。

そして、フライパンで、玉ねぎを飴色になるまで炒める。飴色になった頃に、豚肉を焼き始めて、もう片方のコンロには、水を入れたら鍋を置く。

それからコンロに火を着けて、鍋の中にじゃがいもと人参、玉ねぎ、豚肉を煮込む。今はまだ野菜スープだけど、味見をしてみる。

「うん、美味しい！流石は私だ！」

思わず口から自画自賛が飛び出す。少しずつスープから灰汁を取り除きながら、カレールーのパックを開けていく。

ルーを少しずつスープに溶かしていくと、香辛料の鼻を刺激する独特な匂いが居間中に広がっていった。

「良い匂い～……楽しみだなぁ～」

やがてルーが溶けきり、美味しそうなカレーが完成する。カレーが完成したら、大きめの皿にご飯を半分盛って、上からカレーをかける。そして最後にチーズを乗せて、机まで運んでいく。

居間の机に皿を置く頃には、チーズが丁度良い感じに溶けて、何とも食欲をそそる。

「よし、頂きまーす！」

私は机の前のソファーに座り、カレールーをご飯と共に、口の中に入れた。カレーのスパイスの辛味が、チーズと混ざりあってまろやかな味になっている。私の好みの味にちゃんとなっていて、素直に嬉しい。

「うん、美味しい！明日、あいつに持っていってやろうかなぁ～！」

彼の喜んでいる顔を見れるのを期待しながら、私はカレーを食べ終え、洗い物を済ませてからお風呂に入る。

結局、眠るまで彼のリアクションを期待していた。彼を弄(いじ)るのが楽しみなのか、それとも何か他の感情なのか。今の私には分からないけれど、とにかく明日の休日が楽しみだ。

４話　学園長の娘

僕が黒崎君と、彼女の会話を眺めていると、後ろから小さく声を掛けられた。そして、僕が後ろを振り向くと一人の少女が立っていた。

「あ、赤嶺君……」

「委員長さん。どうしたの？」

彼女は葵（あおい）　雪凪（ゆきな）。彼女はこのクラスの委員長であり、また学園長の娘でもあるため、名前を覚える位には、僕の中で印象に残った。

髪は黒みがかったブルー、長崎は肩まで髪を伸ばしたセミロング位。身長は琥珀より少し低いから、１５０ｃｍ後半と言ったところだろう。

「あの、赤嶺君？」

「あ、ああ、ごめん。それで僕に何の用？」

考えに耽（ふけ）っていたら、目の前にいる彼女の事が頭から抜けていた。こういうところは改善しないとな……

そして、葵さんは言いにくそうにしながら、僕にこう言った。

「わ、私に勉強を教えてくれないかな？」

「僕に？君の方が成績は良いはずだけど……？」
「実は私、国語だけは苦手で……それで、赤嶺君なら言葉を沢山知ってるから、国語とか得意なんじゃないかって思って……駄目、かな？」
そういえば、いつも国語の授業の時は、彼女の質問に答える時のよく響くあの声が、聞こえてこなかった覚えがある。
彼女は目を少し潤ませて、僕に言う。そして、彼女と僕の身長的に、彼女が僕を見上げる形になっている。所謂上目遣い状態だ。この状態は、彼女の、平均よりも大きめだと思われる胸を強調している。
そして、彼女の顔も琥珀に負けず劣らず、かなり美人な部類には入ると思う。大抵の男子ならば、この上目遣いと胸などで、彼女に惚れたりでもするのだろうが、僕にはよく分からなかった。
とりあえず、いつから始めるのが都合が良いか。それを相談するために、僕は口を開いた。
「分かったよ、僕で良ければ。それで、いつから始めるのが都合が良いかな？」
僕が質問すると、彼女は、僕が予想もしなかった事を口にした。
「今日からで良いかな……？私が赤嶺君の家に行くからさ」
「は？」

僕は思わず聞き返してしまった。ほとんど話した事もない、ただのクラスメイトの男子の家に、女子が行こうと言うのか。
「本当に良いの？ほとんど話した事もないのに……」
「良いよ、教えてくれるだけでありがたいから……じゃあ、行こうか」
彼女の方に嫌な気持ちがなければ、僕としては構わない。こうして僕は、葵さんの国語の成績を出来るだけ改善するために協力する事になった。そして、琥珀と黒崎君を残して、僕達は帰っていった。

僕は家に着くと、まず葵さんを居間へ案内し、机の前に椅子を二脚用意した。そして鞄から国語の教科書と、ワークを取り出す。
「じゃあ、始めようか」
「うん、よろしくね」
僕は彼女の反対側に座り、自分の国語の課題を終わらせる。そして、彼女の質問に、出来るだけ分かりやすいように工夫して答える。

「赤嶺君、ここは？」
「ここは、作者の心情を考える問題だね。まずは文章をよく読んで、作者の気持ちを少しでも理解する事から始めた方が分かりやすいと思う」
「成る程……こんな感じ？」
「そうそう。問題と、それに対応している文章をよく読めば、国語は大丈夫なんだよ」
　彼女は、僕が答えを導くためのヒントを教えると、そこから答えを予想していく。見たところ、そこまで大きな間違いはないので、ここは答え合わせの時に直してくれれば良いだろう。
（どうやら大丈夫そうだな……あっ）
　僕が安心して彼女の解答を見ていると、ある事に気付いた。答えの意味はそこまで遠くはない。けれども、漢字を大量に間違えていた。
（意味は似ているけど、字が違うんだよな……）
「葵さん、もしかしてだけど、漢字がかなり苦手なんじゃない？」
　僕がこう聞いてみると、彼女は一瞬驚いたような顔をしたが、自分の解いた問題を見て、気が付いたようだ。
「うん……意味は結構近いらしいから部分点とかはもらえるんだけど、漢字がほとんど駄目でテストの点が上がらないんだ……」

（成る程……けど、漢字は本を読んだり、書いて覚えるしかないからな……）
「葵さんはまず、漢字を少しでも改善した方が良いね。う～ん……どの位の漢字なら書けるの？」
　すると彼女は少しの間考え込み、ゆっくりと、そして自信がなさそうにこう言った。
「多分、漢字検定は五級が限界かな……」
　思っていたよりも不味い事態だ。これじゃあ、国語だけが妙に点数が低い事にも納得だ。
「葵さん、漢字はどうしても沢山本を読むか、漢字自体を書いて覚えるしかないから、それを努力していこう。僕に教えられるような事があれば、力になるからさ」
　僕がこう言うと、彼女は一瞬呆けたような顔をしていたが、やがて控えめだが、とても美しい笑顔を浮かべた。中々人に興味の湧かない僕が、思わず見とれてしまった。こういうものは、端正な顔立ちをした人達の特権だと思う。
　それから、僕は問題のヒントを教えつつ、彼女がワークの範囲を終わらせるのを待つ。
「ふぅ～……終わったよぉ……」
　葵さんは机に突っ伏しながらこう言う。余程疲れたのだろう、彼女の顔色は悪かった。

「お疲れ様、大丈夫？」
「うう～ん……結構辛かった……でも、そろそろ帰るよ～、いきなり押し掛けてごめんね～」
「僕が良いって言ったんだから、大丈夫だよ」
「じゃあ、また明日ね～」
「うん、また明日」
　とりあえず、彼女に少しはヒントになる事を教えてあげられたと思う。これからは彼女の努力次第だ。
（あいつにもこれくらい、慎(つつし)みがあれば良いのに……何て勿体ない……）
「あ、赤嶺君～！」
　僕がそう考えていると、葵さんが居間に戻ってきていた。何か忘れたのかと思い、聞いてみる。
「どうしたの？何か忘れ物？」
　すると彼女は少し恥ずかしそうに顔を赤らめ、
「忘れ物っていうか……その……連絡先、交換したいなーって……良い？」
　訂正しよう。かなり大胆だ、この子。初めて男子の家に来て、しかも連絡先を交換しようだって？勉強のためなのか疑わしくなる位だ……

女子にもきっと色々あるのだろうが……正直、かなり面倒くさそうな世界な気がする。

「別に良いけど……どうして？」

「え、いや、その、いつでも勉強を教えてもらおうかなって！」

そう言うと彼女は、先程よりも一層赤くなり、まるでリンゴのようだった。

とりあえず僕は、彼女と連絡先を交換して、彼女は今度こそ、僕の家を後にした。一応、送っていこうかとも思ったが、迎えの車が来るらしい。

（はぁ～……葵さんはと接する時は、琥珀と違って気が抜けない。凄く嫌という訳ではないけれど、これがしばらく続くと思うとまた胃痛がする……）

そんな事を心配しながら、僕は夕飯を買いに近くのスーパーに出掛ける。スーパーは学校と反対の方向だが、丁度僕の家は、その両方の大体、中間の場所にあるお陰で、行き来はしやすい。

（とりあえず、簡単な物を作れれば良いか）

スーパーに着くと夕方のため、いつも通り人で賑(にぎ)わっていた。とりあえず店内に入り、今夜のおかずを探す。

「う～ん、何にしようか……」

中々、簡単に作れそうな物がない。そんな事を考えて周りを窺(うかが)ったその時、僕の目が一つのお惣菜(そうざい)に止まった。それはこのスーパーで人気の豚カツだった。

(ご飯を作るのも面倒だし、これにするか!)

こうして僕は、偶然残っていた豚カツを三枚と、胸焼け予防のためにレモンとサラダを買ってきた。

そして、また来た時と同じようにゆっくりと家に帰っていった。

家に着いて、まずは買ってきた豚カツを皿に乗せて、レンジに入れる。その後は、レモンを置く小皿とサラダのための皿、ご飯を入れるための茶碗を準備する。

豚カツがレンジで温め終わった頃、少し厚い手袋をして、机の上に置いた。味付けにはソースで良いと思うので、準備しておく。

そしていよいよ、豚カツを口に運ぶ。初めて口の中口に入れると、あげたてではな

いのでサクサクはしていないが、それでも味は塩胡椒がベースの良い味だった。ソースを使ってみても、中々に美味しかった。

その後に、サラダと一緒に食べたり、レモンを豚カツにかけたりと、味や食感の改変も出来て、食べる時にはとても良いと、再認識した瞬間でもあった。

やがて豚カツもサラダも食べ終えると、皿を早々に洗って、風呂へ入った。少し呆けていたお陰で危うく溺れかけたが、何とか途中で意識を取り戻して帰って来た。

そして漸くベッドに入る。今日の葵さんの一件で、胃痛の種がまたしても増えてしまったのは正直、かなり大きな誤算だった。しかし、彼女も、誰も彼も皆、どこかで嘘をついている気がする。

（そういえば、明日は休みだったな……やっと胃痛が止むのか……）

一時は安心したが、どうせ二日後にはこの痛みは復活しているだろう……そんな悲しい予想をした後は、あまりの眠気に考える事が面倒になり、目を閉じた。

◆

「おっかし～なぁ～……今までは私が近付けば、大抵の男子は喜んだのに……やっぱり

彼が特別なのか、それとも……明日も楽しみだなぁ～」

　ある屋敷の一室で、少女は彼を思い、笑う。その笑みはとても美しいものだったが、いつもの彼女が見せる儚げな微笑(ほほえ)みとは違い、見た者を次々と魅了していくような妖艶な笑みだった。

5話　すれ違いの始まり

朝の六時、休日だと言うのに、何故か僕の家のインターホンが鳴っている。いつもなら休日は、もう一時間後に起きるので、ベッドから出るのが少し辛い。

仕方なく、ベッドから出て、パジャマから着替える。とりあえず、暑くないように、近くにあった青い半袖のシャツと、薄い生地のズボンを穿く。

そして、意を決して玄関に向かう。しかし、僕の家に今日は、というかいつも、人が来る事なんてないのだけど……嫌な予感がする。

「はいはい、今出ますよっと……」

胃痛に耐えながら、玄関の扉を開けると、そこには、大きめの袋を持った彼女がいた。どうやら、朝から予感が当たってしまったようだ。

今日の服装は、暑い陽気に合わせて半袖の白いシャツと、青いハーフパンツで、彼女の健康さを際立たせている。服装からして、恐らく、ジョギングの帰りか何かだろう。

「よううっ！　この私が、休日に予定がない、可哀想な樹君に差し入れを持ってきてやったんだぜぇ。さぁ、ありがたーく受け取りなさい」

そう言って彼女は、僕の方に、持っていた袋を突き出した。この言い方からして、受

け取らなければ彼女の機嫌を損ねるだろう。
「はいはい、ありがたや～、ありがたや～……で、これには何が入ってるの？」
「感謝の気持ちが足りないなぁ～、ほら、もっと心を込めて！　じゃなきゃ教えなーい」
僕が適当に返すと、彼女は、その豊かな胸の前で腕を組んで、不機嫌そうな顔をした。朝なんだから、少しは手加減してくれてもいいと思うんだけどな……
正直、面倒だとは思ったが、彼女の機嫌を損ねた後の方がさらに面倒なのは、容易に想像がついた。
「はいはい、誠にありがとうございます……で、一体何が入ってるの？」
すると、彼女は物凄く得意気な顔をして、カレーだと言った。何もそんなに勿体(もったい)つける程の物でもないだろうに……
「有り難く食べろよ～、後で取りに来るからな～、じゃあね！」
僕が何と返すかを、朝のあまり働かない頭で必死に考えていると、彼女は、何故か足早に走り去っていった。理由は分からないが、一応、彼女の姿が見えなくなるまで待って、僕は玄関の扉を閉めた。
それにしてもカレーか……そんなに好きでもないんだけど……まぁ、実際彼女の料理はとても美味しいので、少し悔しい気持ちもあるが、有り難く食べさせてもらうとし

よう。

とりあえず、まずは洗面台の所で顔を洗い、居間に置いてあるスマホを持つ。何か連絡が来てはいないかと確認を終え、彼女から渡された袋を開ける。

中に入っていたのは一つのタッパー。普通のものよりも大きめではあるが、明らかに袋の大きさと合わない。彼女も寝惚けていたのだろうか……

そして何より、彼女に限って、僕に対して羞恥の感情はないだろうし。

そんな事を考えつつ、僕はタッパーを電子レンジに入れる。三～五分くらいの時間にセットしておき、炊飯器の中から、温かなご飯を皿に半分くらい盛り付ける。

ご飯の少し甘いような香りが、僕の方へ漂ってくる。その香りを嗅ぎながら、同時に、温め終わった頃合いのカレーの入ったタッパーを、電子レンジから取り出す。今回は、丁度いい具合に温まっているようだ。

そして、スプーンを棚から取り出し、タッパーの蓋を開ける。すると、カレーに含まれる、香辛料特有の香ばしい香りが部屋中に広がる。

準備を終え、漸く食べられる。そう思った瞬間に、スマホが震えた。基本、音を出さないようにしているため、中々気付く事が出来ないが、今回は気付く事が出来た。

スマホの画面をタップして、メッセージを見ると、メールの差出人の名前が出ていた。どうやら葵さんらしい。まぁ、僕に連絡を寄越す相手なんてたかが知れてるのだが

……内容は、今日も国語の勉強を教えて欲しいとの事だ。
（頑張るなぁ……それだけ国語を出来るようにしたいんだろうか？）
まぁ、苦手なものを克服しようと、努力をしている人を手伝うのは、人とあまり関わらない僕にはよく分からないので、少し興味もある。
すると、再び彼女からのメールで、十時頃に行くと追加で送られてきたので、分かったと送り返す。彼女が来る前に、自分の分の飲み物でも買い足しておくか……
そう思い、僕は学校の側にある、自動販売機まで、飲み物をゆっくりと買いに出掛けた。

自動販売機の前に着くと、その中には色々な種類の飲み物が売っていた。普段から利用している訳ではないのでよく分からないが、皆はよくこの中から選ぶのに苦労しないな、と感心する。
「家にあるお茶とかを彼女に出せば良いと思うから……自分の分だし、これで良いか」
僕は考えた末に、カフェオレを買った。生憎コーヒーは、僕の舌には少し苦すぎるので、カフェオレから慣らしていこうという作戦だ。

たまにはこんな事に挑戦しつつ、僕は家に帰って、居間で勉強する準備を終わらせ、彼女が来るまでの残り三時間に、少し仮眠を取る事にした。

◆

私が勉強を教えてもらいに行く彼は、あまりモテる方ではないと思う。クラスメイトの子達からもそんな噂（うわさ）は聞いた事がないし。

でも、私は彼に興味がある。どうして、人の前で、あそこまで自分らしくいられるのか。

人と上手く付き合っていくためには、自分らしさは、ある程度犠牲にしないといけないと私は思う。

彼のように一人でいる事は私には出来そうもないけれど、だからこそ、私は彼に興味がある。私を真っ正面から見ても、動じなかったのは彼が初めてなのもその一つだ。

そんな事を考えていたら、いつの間にか彼の家の前まで、家の車が到着した。男の運転手の方にお礼を言ってから、笑いかけてみた。本来の私の笑いで。

その運転手の方は、私の笑顔に見入っている。普通の男の人ならばこうなるはずな

のに……たまに女の子でもなるんだけどね。

そう思いつつ、私は、彼の家の扉を叩く。すると、彼はすぐに出てきて、私を招き入れてくれた。

勉強する場所は、前と同じ居間だったけれど、私を気遣ってか、エアコンがかけてあった。そして、机の前には、やはり前と同じように座布団(ざぶとん)が用意されていた。

彼は私の正面に座って、国語の課題であるプリントを白いファイルから取り出した。

「じゃあ、始めようか」

「う、うん……」

やっぱり彼は動じない。私も勉強のため、鞄(かばん)の中から、課題のプリントを取り出した。そして、それぞれのペースで進め始めた。

私が分からなくて悩んでいると、彼は、その問題が解きやすいように、ヒントをくれる。私が漢字を間違っていれば、辞書を取り出して、丁寧に教えてくれる。

そうして、漸くプリントを終わらせたけれど、まだ終わりじゃない。今回はもう一枚、もうすぐある漢字検定に向けてのプリントがあるのだった。

最初は頑張って、自分で解いてみる。解けるだけ解いて、彼に見てもらうと、彼は自分のプリントと見比べて、答え合わせをしてくれる。

やはり、間違っている所がかなりあったようで少し落ち込むが、彼はその漢字の覚え方を分かりやすく教えてくれる。
「例えば、画数の多い漢字なら、少しずつ書いていく。分解して見てみれば、そんなに難しい字はないからさ」
「な、成る程……じゃあ、こうすれば……っど、どうかな？」
私がこう言うと、彼は私の書いた字を見てくれる。彼の表情から見て、今回は合っていた事に安心したし、嬉しかった。
何とかプリントを終わらせると、彼は私のために、冷たいお茶を持ってきてくれた。
「あ、ありがとう……！」
「どういたしまして、お疲れ様」
休憩を一時間程挟んで四時、私達が復習をしようとすると、彼が学校に忘れてきてしまったという。中々ない事なのか、いつも冷静な彼が焦っていた。
「ちょっと学校まで取ってくるよ、悪いけど、葵さんはここで待ってて！」
「あ、赤嶺君……！」
彼は私にそう言うと、急いで学校まで走っていった。彼を待ってるこの暇な時間は、この部屋を見て回る事にした。
そしてもちろん、彼に本当の自分を見せた時のリアクションにも期待をしながら。

◆

葵さんに国語を教え終わって、復習をしようとした時に、僕はプリントを一枚、学校に置き忘れてしまっていた事に気付いた。

彼女を待たせる訳にはいかないので、急いで学校に向かう。先生からの許可を取り、階段を駆け上がる。

教室に着くと、自分の机の中からプリントを発見しようと漁った。思いの外、早く見つける事が出来たので、プリントを持って、急いで外へ出た。

すると、僕が出てきた時、黒崎君を見つけた。相変わらず休みの日でも、身だしなみ等を徹底しているのが、遠くから見ても分かる。

そして初めは、彼が一人で散歩でもしているのかと思ったが、よく見ると、彼の隣には琥珀がいた。その時、僕は昨日の黒崎君の言葉を思い出した。

〝落とす〟と言っていたが、彼と琥珀が一緒に歩いている姿は、確かに釣り合っている。美男美女でお似合いだし、彼女も楽しそうにしているので、良かったと思う。

そうは思っているのに、自分の家まで歩いている間、ずっと僕の心には靄(もや)があった。上手く説明出来ないけれど、とても気持ちの悪いものだった。

家に着くと、葵さんが座布団に座って待っていた。少しボーッとしているため、一人は退屈だったのが分かった。

「葵さん、ごめんよ。今戻ってきたから」

「あ、赤嶺君……お帰り」

「うん、じゃあ続きを……!?」

僕がそう言った次の瞬間、僕の身体は、葵さんによって、床に押し倒されていた。

「あ、葵さん、一体何を……!?」

急な事で、思考が追い付かない。何故、葵さんが突然こんな行動に出たのか、その理由が全く分からない。

とりあえず理由を聞こうとすると、彼女の方から先に言葉を発した。

「赤嶺君……」

呼び掛けられ、僕は彼女の顔を見る。彼女は微笑みを浮かべていたが、今の彼女の

顔は、いつもの物静かな彼女を象徴した微笑みではなく、見る人の心を誘惑する、魔性の微笑みに見えた。

「赤嶺君ってあんまりモテないよね……」

その微笑みのまま、彼女は心に刺さる一言を僕に言い放った。僕が困惑している間にも、彼女は笑みを深めて続ける。

「でも、私は貴方に興味があるんだよ……？」

そう言って、彼女は僕の身体に覆い被さる。彼女の方が身長が低いので、苦しいという事はないが、彼女の胸が、僕の胸より少し下の辺りに、押し付けられている状況だ。

彼女の胸が、僕の身体の上で形を変えている。最早、目で見なくても、彼女が僕にぴったりと張り付いているのが分かる。

そして、僕が彼女に何とか、上から退いてもらう方法を考えている時にも、彼女は僕の首筋に舌を這わせている。その音が耳に響いてくるおかげで、さらに辛い。

正直な所、理性が持ちそうにないので、力ずくで彼女の身体の下から抜ける。

「はぁ……一体、何のつもり……？悪戯なら勘弁して欲しいんだけどな……」

「別に、手を出しても良かったのに……」

僕が必死で耐えたというのに、彼女は僕に聞こえるように、こう呟く。

何故ここまで大胆な事が出来るのか、不思議に思ったが、今は頭を使いすぎた事に

よる疲労でそれどころではなかった。
「今日は残念だけど、これで帰るよ。これからもよろしくね、赤嶺君？」
そう言って、葵さんは帰っていった。彼女の姿が見えなくなった瞬間、身体から力が抜けてしまったらしく、足が震えている。
「はぁ……また胃痛の種が増えてしまった……一体、どうしたら良いんだろう……」
僕はぼやきながら、脱力した身体の力を何とか振り絞って、自分の部屋のベッドに倒れ込んだ。
（あ、そういえばタッパー……）
「琥珀に返さないとな……休み明けで良いかな、あいつは取りに来るとか言ってたけど……それに確か、休みが明けてすぐに、旅行とか何とか言っていたような……どうしようか……」
僕は琥珀の事を思い出し、あのタッパーをいつ返すか考えていたが、さっきの事の疲れでいつの間にか寝てしまった。

◆

「はぁ～、楽しかったぁ……彼もやっぱり男の子なんだねぇ……次の勉強の日が楽しみだなぁ～……」

彼でも私に見蕩(みと)れた……その少し前にあった嬉しい事実を思い出しながら、私は次にまた、彼と二人きりで会える日が、楽しみで仕方なかった。

6話　すれ違いの始まり2

昨日の夜、黒崎君からメールが届いた。内容はさりげなく、だけどどこかキザっぽさを残したもので、一緒に商店街まで出掛けようというデートの誘いだった。

時間はお昼からで、商店街の入り口で待ち合わせ。この町の商店街はかなり広いので、多分ショッピングにでも連れていってくれるんだろう。

（う～ん……気は乗らないけど、折角誘ってくれたんだし、行こうかな）

とりあえず、彼にＯＫと返事を送って、明日の服を選ぶ。服を出そうとクローゼットを開けようとした時、ふとある事に気付いた。

（あ、あのカレー……絶対作ったのにあいつの所に持っていってないや……）

すっかり忘れていたので、気持ちの整理等も兼ねて、彼の家までジョギングに出掛ける事にした。

さっそく走りやすい青いハーフパンツと、いたらしい。白いシャツをクローゼットから取り出して、さっきまで着ていた桃色のパジャマを脱ぐ。

着替えを終えてから階段を降り、パジャマを洗濯機の中に放り込む。そしてすぐさま台所に向かい、棚から大きめのタッパーを取り出す。

続いてカレーの入った鍋の前に行き、玉じゃくしでカレーを掬(すく)ってタッパーに入れる。それと同時に大きめの袋を下の棚から取り出して、タッパーを入れる。

これで準備は出来た。さぁ、樹にこのカレーを差し入れて、どんな顔をするのか見てやろう。

カレーを袋の中でこぼさないように、ゆっくりと小走りで彼の家に向かう。時間を見ると、まだ六時を少し回った所だった。

この時間を選んだのはちょっとした気晴らしと、彼が十年前と変わっていないのならば、朝は苦手なはずだからという、ちょっとした悪戯心も込めてある。

あいつの生活は昔から、まるで機械のように決まっている。何時に何をするのかという予定が、全て予め(あらかじ)決まっているのだ。

素直に尊敬出来るけれど、私から見ていると、まるで何かにがんじがらめに縛られているようで、正直つまらないし、落ち着かない。

でもあいつには、友達がいないし、探す意欲もないから、予定を乱す人が誰もいない。

それなら私が乱してやろう。乱して乱して乱しまくって、あいつが皆と話すようになる位、コミュニケーションを強要してやろう。

そう決意を固めた所で、樹の家に着いた。この時間では恐らく彼は寝ているか、起きたばかりだろうと予測して、あえてインターホンを鳴らす。

インターホンを鳴らして少し待つと、中から人が動く音が聞こえてくる。この家には彼しかいないから、音の発生源はすぐに分かる。

しばらくすると、明らかに不機嫌な顔をした樹が出てきた。やっぱり昔と変わらず朝が苦手なようで、慌てて着替えた感じが出ている。

彼も私が来たという予想はしていたんだろう。嫌な予感が的中したと思っているのが簡単に読める。案外難しい事を言っているようで、彼の思考は単純なのだ。

そして、そんな彼に明るく言葉を掛けながら、袋を差し出す。

「ようっ！　この私が、休日に予定がない、可哀想な樹君に差し入れを持ってきてやったんだぜぇ。さぁ、ありがたーく受け取りなさい」

彼は露骨に嫌そうな顔をするが、流石に思い切り言うのは気が引けたのか、オブラートに包んで返事を返す。

「はいはい、ありがたや～、ありがたや～……で、これには何が入ってるの？」

「感謝の気持ちが足りないなぁ～、ほら、もっと心を込めて！　じゃなきゃ教えなー

い」

若干やり過ぎたかと思ったけれど、彼はそんな事を気にする性格ではないので、冷たいまでのスルーをする。流石の私でも不機嫌が顔に出ているだろう。

彼も、ここで私の機嫌を損ねる事が損な事は十分に分かっているようで、形だけを丁寧にした感謝の言葉を口にする。

「はいはい、誠にありがとうございます……で、一体何が入ってるの？」

ここですぐに答えてやる程、私は甘くない。少し間を置いてから、袋の中はカレーだと教える。彼はそれを聞いた瞬間、呆れたような表情をしたが、いつもの事だ。

「有り難く食べろよ～、後で取りに来るからな～、じゃあね！」

彼の返答を聞かずに、私は走り出す。この後の黒崎君とのデートを思うと気が重くなるので、その気を紛らわしておこうという考えだ。

ジョギングをして、心を落ち着かせた後、黒崎君との待ち合わせの時間が近付いている事に気付いて、少し驚いた。

正直な所、そこまで長く走った覚えはなかったのもあるけれど、樹の家でかなりの

時間を過ごしていたみたいだ。
　急いで家に戻って着替える。私がこっちに来てから、もう一ヶ月も経っているからかなり暑い。とりあえず、涼しそうな服装を選ぶ。
　結果、私が選んだのは、薄いブルーのワンピースと、白いスカート。この服にした理由は、これが一番最初に目について、尚且つ季節にピッタリだったから。
　服を決めたらすぐに着替えて、待ち合わせの時間に遅れないように靴を早めに選んで、歩き出す。

　十分程余裕を持って商店街の入り口に着くと、既に黒崎君がそこに立っていた。
　彼の服装は白いシャツにジーンズ。左手に赤い上着を持っていたから、暫く待っていて、暑くなったから脱いだ感じだろう。
「白沢さん、早いね。まだ十二時には少し時間があるのに……」
　彼は私が早めに来た事に驚いたような顔をしていた。私以外にも、何人もの女の子と付き合ってきたんだろうけど、この反応から見て、皆は時間ギリギリに来たようだ。
「ううん、黒崎君も早いじゃん」

私がこう返すと、彼は笑いだし、そのまま二〜三分は笑っていた。多分、女の子を待たせる訳にはいかないとか言うんだろうなぁ……

「女の子を待たせる訳にはいかないからさ。じゃあ行こうか！」

彼は私の予想通りの言葉を口にして、歩き出す。私もすぐに後を追うが、その前に彼が歩幅を私に揃えてくれた。

最初に立ち寄ったのは、予想通りのショッピングモール。私としてもオシャレはしたいので、黒崎君のこういった気遣いは凄いと思う。

……本当は顔と運動神経だけでモテてるんだと思ってた事は、彼にはこの先ずっと隠していないといけない。

そしてお店の中に入って少し経った頃、一着の服が目に留まった。

真っ白な、細かいフリルのついたワンピース。私は自分の名前に白という字が入ってはいるけれど、そのせいであまり白は好きじゃない。むしろ嫌いな方だ。

理由はこの髪の色とも被るし、遠くから見たら、光を反射し過ぎているんじゃないかと心配になるから。だから上には基本的には着ない。

でも、このワンピースからは、何故か不思議と目が離せなかった。自分の嫌いな色が、初めて好きになれた瞬間だった。

私がそのワンピースを見つめていると、いつの間にか黒崎君が横に立っていた。

思ったより長い間、このワンピースに見惚(みと)れてしまっていたらしい。
「これ、欲しいの？」
黒崎君は私に優しく問い掛ける。正直欲しいけど、人に払ってもらうのは気が引ける。
私が大丈夫だと断ろうと思った時、黒崎君はもう、店員さんに声を掛けていた。
「すいません、この服いくらですか？」
「黒崎君！　大丈夫だよ、人に払ってもらってまでは欲しくないし……」
すると黒崎君は私の方に向き直って、こんな言葉を口にした。
「良いよ、折角一緒に来たんだから、払わせてよ。白沢さんみたいな綺麗な女の子に着てもらった方が、このワンピースも喜ぶよ」
相変わらずキザっぽさが目立っていたけれど、この時の彼の目はいつもよりも本気で、私は思わず口をつぐんでしまった。
その隙に黒崎君はワンピースを購入し、その袋を私に差し出す。
「黒崎君、ごめん……！　後で絶対に返すから！」
もう買ってもらってしまったので返す訳にもいかず、私は袋を受け取った。そしてそのまま、同じショッピングモールの中にあった、喫茶店に入った。
彼と二人、向かいあって座り、メニュー表を見る。やっぱり喫茶店なんだからケー

キが主だった。

私はチョコレートケーキ、黒崎君はチーズケーキをそれぞれ注文した。そして、ケーキが来るまでの間は、学校での皆への態度の話をする。

「女の子達に好かれるのは嬉しいんだけど、たまに大変なんだよな」

「あ～……、確かに色んな人に好かれ過ぎても大変なんだよね～」

こんな話題でも話せるのは、私達が皆から話し掛けてもらえるからなのは分かっているけれど、たまに全部吐き出したくなる。そんな彼の気持ちはよく分かる。

そんな事を話していると、二つのケーキがやってきた。チョコレートケーキは小さいながらも、美しい見た目になるように、細部にも細かい装飾がされている。

チーズケーキも同じように、細かい装飾が施されており、見ているだけでも楽しい。食べるのが勿体ない位だ。

（今度、樹と来たいなぁ……あれ!?　何で今、あいつの顔が思い浮かんだの!?）

今は黒崎君といるんだから失礼だと思って、必死にケーキを食べる。ケーキはとても甘くて、口に入れたらすぐに溶けてなくなってしまった。

黒崎君のチーズケーキもそれは同じみたいで、彼も美味しそうにケーキを頬張っていく。

あっという間にケーキはなくなり、最後にコーヒーを飲んだ。コーヒーの心地よい

苦味が、甘くなった口の中を程よく中和してくれる。
名残惜しいが食べ終わってしまったので、お会計を済ませてお店を出る。結局彼が全て払ってしまったので、申し訳なさが凄い。

お店を出た後は二人でブラブラと散歩をした。喫茶店で学校の話はしたので、この時にはお互いに好きな曲などの話を始める。
「へぇ～、白沢さんもその曲好きなんだな」
「うん、黒崎君も好きなんだね、格好いいよね～！」
意外な程に彼とは趣味が合い、話していて退屈する事はなかった。ふと時計を見ると、もう三時を回っている事に気付く。
そして、樹の家にタッパーを取りに行くと決めていた事も。あいつには、私の作ったカレーを美味しいと言わせなくては。
「ごめん、黒崎君！　私、これからちょっと寄る所があるから、先に帰るね！」
「あ、ああ！　また一緒に出掛けような！」
彼の言葉に頷いて、私は樹の家に向かって走る。幸いな事に、黒崎君と別れたのは

学校の前だったので、彼の家は遠くない。

樹の家の側まで来ると、彼が家の中に入っていくのが見えた。飲み物を二本持っていたので、多分誰かが家の中にいるんだろう。

（え？　樹に……あいつの家に人がいる!?　あいつの家に来る人もいるんだぁ～……）

そう思いながら、私も玄関を開けて入ろうとすると、中から何かが倒れるような、かなり大きな音がした。

樹の家の居間にはいつも開いている窓があるので、そこから覗(のぞ)いてみる。

すると中には樹と、なんと委員長の葵さんがいた。確かに葵さんが樹の家にいる事にも驚いたけれど、私が一番驚いたのは二人の体勢。葵さんが樹の身体を押し倒しているのだ。

（はぁっ!?　何がどうなってるの!?）

困惑しながらも、私は二人から目が離せなかった。まるで二人だけで全てが完成しているような、そんな景色に見える。……樹が彼女の下でもがいてなければ。

いつもなら、こんな状況を見ていると面白くて楽しいはずなのに、何故か心がざわついている。

あれこれ考えていると、樹と葵さんを見失った。どこかと探していると、玄関からとても楽しそうな顔をした葵さんが出てきた。

急いで隠れて、彼女の様子を窺う。すると彼女は私に気付いていたようで、こちらに妖艶な笑みを浮かべて去っていく。

彼女が去った後、タッパーを取りに中へ入れてもらおうかとも思ったけれど、何故か入るのは気が引けた。

逃げるように私は家に帰って、週明けの旅行の準備をする。その後はお風呂に入って気分を変えようとした。けれど、心に残った、この嫌な感じは消えなかった。

それを忘れようと、私は二階へ行って、自分のベッドに潜り込む。しかし、いくら寝ようとしても眠くなる事はなく、その日は一睡も出来なかった。

そのため、自分のこの気持ちの正体を必死に考える事にする。一晩中考えに考えたけれど、今の私には、この気持ちの正体は分からなかった……

7話　修学旅行

僕達の学校の修学旅行は何故か早い。場所は普通に沖縄だが季節を考えると、何だか可笑しい気がする。

しかし行かない訳にもいかないので、早起きをして準備をする。

「はぁ～……何もこんな暑い時に行かなくても……」

けれど文句を言っても旅行の日程は変わらない。仕方なく、準備を済ませ、忘れ物がないか確認をする。……どうやら大丈夫だ。

溜息(ためいき)をつきながら、僕は家を出て鍵を閉め、ゆっくりと学校へ向かって歩き出す。

新緑の草木を眺めながら歩いていると、ある違和感に気付いた。いつも僕を振り回している彼女の姿がないのだ。

（あれ、あいつ今日は絡みに来ないのか……なんだか後々何か起こりそうで不気味だけど、今は胃痛の種がない静かな時を楽しんでおこうか）

そう思い直し、僕はさらに歩を進める。そうしてすぐに学校の形が見える。そう思えば、やはり近いのはいいなと思う。

しかし、例えば人と会いたくない時に家に引きこもっていると、学校からすぐさま

連絡が来るであろう。違う側面から考えれば、家と学校が近いのは便利な反面、面倒な所もあると気付く。

僕はこんな風に、自分の中で色々な事を考え続ける時間が好きだ。いつも一人でいたから身に付いた考え方なのか、他の人には理解がしにくいようだ。特に沢山の人の中心にいる人達には。

彼女もそうだが、あんな風に人に愛想笑いを振り撒いて、一体なんの得がある？

その時は持て囃されるけれど、結局は疲れるだけでいずれ自分から皆離れていく。

そんな分かりきった正解を探すのに一体何年掛けるつもりだ。分かっているのに孤独が耐えられない人もいるから否定はしないが、僕には正直な所、真似は出来そうもない。

こんな考え方をするようになってからは、人もさらに離れていくようになった。それでも僕は元々友達なんていなかったし、心を許せる人など今も皆無だ。

必ず人と関わる事になるイベントは早く終わらせるに限る。主に体力の温存のため、それと読書の時間に費やしたいのもあるが。

こんな風に自分と向き合っていると、すぐに時間が過ぎていく。いつの間にか僕は自分のクラスの列に並んでいて、同じ班の人達と、空港行きのバスに乗り込んでいた。

この学校は基本、男女合同の班編成だが、今年は学園長の鶴の一声で、女子よりも三時間は早い時間で男子は動く事になっている。多分、自分の娘に近付く輩が我慢ならないのだろうと、僕は考える。

過保護にも思えるが、それがきっと普通なのだろうと納得する事にした。僕には、普通の家庭がどんなものか分からないから。

そんな事を考えているともう空港に着いてしまった。ここでも班行動をする事になっていたので、この時僕は初めて自分の班の人達を見た。

しかし僕の周りには最早人はおらず、必死で少し先にいる学生服の団体を追いかける。

男子三人の班で纏められているのだから……そう思い僕は旅のしおりなるものを凝視する。すぐに僕の名前を発見すると、黒崎君が僕と同じ班だった。もう一人は黄村君という人らしい。

僕が慌てて彼等を探すと、黒崎君がこちらへ走ってきた。向こうも僕を探していたらしい。彼の後ろから眼鏡を掛けた男子も走ってきた。彼が黄村君だろう。

黄村君は、中肉中背で平均的な体つきをしていた。しかし髪が少し黄色がかってい

るのと、その日本人離れした顔が僕の目を引く。そして、彼が掛けている眼鏡と相まって、とても知的に見える。

「君が赤嶺君だよね？　僕は黄村（きむら）龍馬（りょうま）。これからよろしくね！」

「あ、ああ、うん……」

彼はその知的な見た目からは、想像もつかない程親しみやすく、面食らった。しかし急に距離を詰めてくるのはあいつと黒崎君で慣れている。

そのまま少し遅れたが、僕達は無事に空港でパスポートを見せ、飛行機に乗り込む事が出来た。初めて空港からどこかへ行くためにかなり慌てた事は、僕の人生の汚点、即ち黒歴史として、永久に皆の記憶から抹消したいと思う。……決して叶いはしないのだが。

僕達の班は後ろの方で、僕は窓際、黒崎君が隣、そして僕の正面に黄村君の形で、指定席に座った。

人生で初めての飛行機だったが、黒崎君は女子がいないなんてつまらないと言って眠り、黄村君は他の班の男子達と、表情を目まぐるしく変えながら話している。

僕はと言えば、読書に時間を費やす。一応ゆっくり読もうと持ってきた、全八百ページは越える本を読み始める。

しかし、黄村君達の笑い声や奇声等で落ち着いて読めたものじゃない。仕方なく、

僕も黒崎君を見習って、沖縄に着くまで眠る事にした。

一時間位眠っただろうか。時計を見ると十二時を回っており、皆が荷物を持って座席から立ち始める。そして紫藤先生の声が、僕に向かって響く。

「赤嶺！　早く降りろ、置いてくぞ！」

そう言いながらも僕を待っている先生。まぁ、生徒の誰か一人でも置いていった場合、この先生のクビは確定だろう。しかしここは、先生の顔を立てておこう。

そう思い、僕は一人、遅れながら飛行機を降りる。

上を見上げると、天気は生憎曇（くも）っており、写真で見たような空の青さを、この目で確かめる事は出来なかった。

しかし、こんな暑い時期に、一番暑い場所へ来ているという事を思い出して、晴れてなくて良かったと安心する。

とりあえず皆に追い付こうと、僕は急いで係員の人にパスポートを見せ、ゲートへ向かう。

ゲートの前に着くと、皆が班ごとに整列をして、先生からの指示を待っているようだった。勝手に動くのは流石にまずいと、彼等でも分かっているのだろう。

数分で黒崎君達を見つけ、その横に紛れ込む。それからすぐに紫藤先生が追い付いてきて、僕達に指示を飛ばす。その指示に従い、またバスに乗り込んだ。今度はホテル

に行くそうだ。
　バスの中でも、やはり皆変わらず眠ったり、友達同士で話したりしている。僕もやる事がないため、もう一度眠る事にした。しかし、今回は寝入る前にホテルへ到着したらしい。
　今度は遅れないように、しっかりと準備を整えておいた。皆に続いてバスから降り、上を見ると、雲の隙間から、少しだけ太陽が覗いていて、僕達を照らし始めている。
　そうして暫く空を見ていると、先生の班ごとの部屋や、動きを指示する声が聞こえたため、慌てて空から目線を先生に切り切り替え、話を聞く。

　先生の話が終わるとすぐに、僕達はホテルの中へと向う。しかし真正面から見ると、かなり豪華なホテルだ。規模が広く、西と東に別れている。
　どこかの貴族が好みそうな荘厳な造りで、中に入ってエントランスを眺めているだけで、数々の美しい絵画が目に入る。まるで美術館並みだ。
　この絵画は全てレプリカだと、従業員の方が教えてくれたが、それでも美しいと僕は思う。そして、本来このホテルに泊まるために必要な金額を思い浮かべて、気が遠く

なった。

暫く経った後、黒崎君と黄村君が僕を待っているのに気付き、急いで謝って、部屋へ向かう。

僕達の班の班長は、いつも自信があると思う黒崎君に任せ、僕と黄村君はその後を付いていく。彼は少し不満そうな顔をしたが、拒否はしなかった。

先生の話によると、男子の部屋は東のほうらしく、僕達は階段を登っていく。三階まで登ってきて、漸く部屋を見つける事が出来た。

黒崎君が鍵を使ってドアを開けると、部屋の中に入る。部屋の中はベッドが三つあり、ちゃんとトイレもあった。そして、この部屋にもきちんと絵画が飾られている。

黄村君はすぐさまベッドの上に寝転がり、外を熱心に眺めている。黒崎君はベッドに腰掛けながら、スマートフォンをいじる。

「そんな絵なんか見て、何が楽しいんだよ?　こんなむさ苦しい場所で……早く女子達に囲まれてぇよ……」

黒崎君が溜息混じりにそう言う。彼にはこの絵の美しさが分からないのだろうか。まぁ、そんな人もいるのだと納得し、僕も話を切り出す。

「まぁ、分からないなら仕方ないよ。それと黒崎君、質問したいんだけど、葵さんの事、どう思う?」

「葵？　ああ～……あいつに誘惑でもされたか？　いやまさかな……え!?」
　彼は僕の顔色を見て察したらしい。驚きの声を発する。
「その顔色だと当たったみたいだな……で、悩殺されたか？」
「されないよ、君じゃないんだから……どうしたら良いと思う？」
　すると黒崎君は笑いを堪えているような顔をする。何故かと聞くと、とうとう彼は吹き出した。
「はははは！　だってお前があいつとくっつけば、俺が白沢さんを狙えるじゃん？　敵に相談してどうすんだよ、全く……はははははは！」
「仕方ないだろ……まともに話せる男子は今のところ、君くらいなんだから……」
　僕がこう言うと、彼はますます笑い転げる。そして、そのまま笑いながら話し出す。
「ははは……で、あいつをどうするか、か……正直な所は俺には分からん！」
　予想外の答えに僕は驚いて、理由を尋ねる。するとまたもや、彼の返答は予想外だった。
「だってあいつ、俺の事嫌ってるもん！　女たらしは嫌いらしくてな！　まぁ、俺もあいつは好きじゃないけどな。なんとなくだけど」
　葵さんなら、彼にも手を出していると思ったんだけれど、お互いに嫌ってるって……理由を聞いて、同族嫌悪だと思ってしまったのは割愛しよう。

「そうかい……まぁ、ありがとう」
「いや、お役に立てたならなにより……っははははは！
いやー、良いネタだわ……笑いが止まらねぇ……」
黒崎君との話は終えたが、彼の笑いが暫く部屋の中に響き続けた。あまりに長かったので、黄村君が心配して僕に聞きに来た程だ。
彼は心配ないと伝えると、黄村君も安心したようで、顔に満面の笑みを浮かべる。その後、流れで彼とも話をしたが、意外にも本の話題で僕達は気が合った。
暫く話をしていて分かったが、彼の表情は目まぐるしく変わるので、話す方も楽しい。彼の話も聞いていて面白いものだったし、仕草もかなり大袈裟（おおげさ）だったので思わず笑ってしまった。
時間はすぐに過ぎ、夕方に女子達は到着したらしい。明日は班行動があるので、その時にあいつにも会えるだろう。
旅行一日目で、僕はやっと一人目の、まともな友人が出来たと思う。そして、出来ればこの旅行中に、あいつの機嫌も直せれば良いなと思った……